



## 「自己肯定感」の大切さ

校長 岩崎 撰也

夏休み明け、2学期の始まりはたいいてい子どもにとって「嫌なこと」であるように思います。2学期は期間も長く、勉強も難しくなる、そういった不安や夏休みが終わってしまった寂しさといった負の感情が心にあります。加えて休み中の生活リズムの乱れ(昼夜の逆転、インターネット、ゲームなど)が負の感情を増幅します。18日の始業式では体のリズム、心のリズムを戻し、気持ちを切り替えて2学期の学校生活に臨んでほしいという話をしました。また、心が不安定になるこの時期、各学年において生徒たちの様子を見取り、寄り添い、励ます支援をしていきたいと思ひます。

さて、4月に行われた全国学力学習状況調査の集計結果が学校に届いたところですが、この結果の中で特筆すべき変化の兆しが見られました。この調査では学力の調査とともに生徒質問紙の中で生活や学習状況も調査しております。その中で「自分には、よいところがあると思ひますか?」「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思ひますか?」という質問に対し、ほとんどの生徒が「そう思ふ」「どちらかといへばそう思ふ」と回答しており、この結果は全国平均を大きく上回っています。

この質問は「自己肯定感」について調査するもので、「自己肯定感」が高いとは、人と比べて優れているかどうかではなく、そのままの自分を認める感覚であり、「自分は大切な存在だ」「自分はかけがえない存在だ」と思える心の状態です。この感覚が持てると、自分を尊重するように他者や周りも尊重できます。すると他者からも尊重され、互いに尊重し合える関係が作れます。逆に「自己肯定感」が低いと、さまざまな場面で責任から逃れたい、他者とコミュニケーションを取りたくない、他人の評価が気になり主体性がなくなるという状態に陥ります。数値化できないけれども生きていくためにも大切といわれる「非認知能力」(コミュニケーション力、協調性、主体性、実行力、統率力など)を獲得する上で土台となる大切な資質です。

5月の巻頭言でもお伝えしましたが、学校では生徒の「人間関係形成力の向上」を目指し、生徒指導の3機能(自己決定の場を与える、自己存在感を与える、共感的人間関係を育む)を土台として、生徒一人一人にとって学校が「自分の居場所」と感じられる空間であることを全教職員が意識して取り組んでおります。今回の調査における「自己肯定感の高さ」を維持できるように、今後も生徒一人一人が自分を尊重し、他者を尊重する、互いに尊重し合える関係性の中で、生徒たちの「自己肯定感」を育てていきたいと思ひます。

【自己肯定感から認知能力までの全体の関係性】

